

## (財) 札幌市公園緑化協会と連携・協力に関する協定調印

本学と(財)札幌市公園緑化協会は、自然環境保全を目指す「連携と協力に関する協定」を結び、8月18日(水)、札幌市清田区の平岡公園にて調印式が行われ、谷山弘行学長と(財)札幌市公園緑化協会の浅川昭一郎理事長が協定書にサインしました。

同協会が管理する都市公園では、道外から持ち込まれた外来生物の増加や水質の変化など自然の生態系に影響を及ぼす問題が生じていることから、本学に環境調査を依頼し、本学では2007年頃から環境システム学部生命環境学科を中心に、平岡公園や豊平川サケ科学館での環境調査等に協力し、同協会は大学に対し博物館実習に協力するなど連携を深めてきました。

平岡公園では、日本ザリガニをはじめとする希少動植物の分布調査や外来再生類のトノサマガエルの捕獲、ウメの花やつぼみをエサにする鳥(ウソ)による梅林の被害調査、湿地などの水質化学調査のほか、自然観察会など子どもたちを対象にした環境教育の普及・啓発に取り組んできました。

今回の協定締結は、平岡公園でのトノサマガエルの増加が深刻化していることや西岡公園付近でのクマの出没により一部立ち入り禁止区間が設けられたことなどを理由に、調査範囲を広げ、本格的な環境保全対策を推進するため両者の連携・協力を強化し、問題を解決していこうというものです。

調印式では、(財)札幌市公園緑化協会の浅川昭一郎理事長が、「これまでの実績をふまえて調査研究をさらに広げて行ってほしい」と期待を込め、

谷山弘行学長は、「自然環境が注目される中、本学学生の貴重なフィールド調査の場として活用させていただき、発展的な活動へとつなげていきたい」とあいさつしました。

この日、両関係者約30名に加え、調査を行っている学部学生、大学院生10名が同席し、調印式のあと調査現場を確認しました。

平岡公園の環境調査を担当してきた吉田剛司准教授は、「外来種であるトノサマガエルが爆発的に増えています。まずは、この事態をなんとかしないとなりません。本来、北海道に生息するカエルの在来種は、エゾアマガエルと日本アマガエルの2種のみです。

野生動物保護管理学研究室では、外来種のトノサマガエルを捕獲し、食性や産卵行動を観察し、本来北海道に生息するカエルにどのような影響を与えるかなど調査しています。外来種のトノサマガエルは、虫類などをなんでも食べつくす習性があるので、在来種との共存は難しいと分析しています」と話しました。